

宝永の火山灰

インターネットを初めて早二年になる。今月の句の中に

一地層なすべく紅葉黄葉積む

なる句があつて、「一地層なすべく」という表現が我が目を引いた。というのもこの一語から鮮やかに思い出す一事があるからだ。それは昨年の年も押し詰まった頃、

県立 金沢文庫の非常勤をやっている妻が、今称名寺に於いて、称名寺絵図（古図）に基づいて、発掘調査をやっているらしいと言いつ出したからだ。興味半分に出かけてみようという気になって、阿字ヶ池あたりをぐるりと巡っていると、旧金沢文庫の跡地あたりに土砂をこんもりと盛り上げ、周囲を金網フェンスで囲い工事は真つ盛りの様だ。

中で一人の男がレジメを渡しながら、何やら大声で説明をしている。係の人に中に入れてもらったら早速レジメを渡された。それを見るとどうやらこれは教育委員会発掘の間報告らしい。掘り下げたいくつもの長方形の穴の底に立ったり、土砂の上ののぼって説明している。

この時、私は始めて発掘調査なるものが、地層というものをベースに推量し考察するものだとは知った。

その説明員は謂う、「この地層は大凡○○時代、この上の地層は△△時代」と言ったと思つたら、つかつかと穴底に降りて行って、何やら土器みたいなものを取り上げて、「××さんちよつと」と一人の男に呼びかけた。「これは○○時代のものと思うがどうですか」と言うのと、呼びかけられた風采があらぬ男が土器をひっくり返し見て、「そうですね、○○時代のものでしよう」と半ば断言気味に言った。

その言い振りはとても素朴で好感のもてるものであった。そこで私は改めてここに参加している男衆の面々をみると皆一国一城の主、その道のエキスパートの面構えをしている。頼もしい男衆と感じたのは言うまでもない。

そんな連中にうち交じって、穴から穴へと渡り歩き、説明を受けながらと或る穴の前に来た。穴の脇には黒々とした土砂

が積み上げられている。明らかにその他の穴の土砂とは違う色をしている。

「そこに井戸があるでしょう」と穴の中を指し示して言う。

「あの井戸を掘ったらあの黒い土砂が出てきたのです。

たぶん、宝永の富士の火山灰です」

宝永の富士の火山といえ、今から三百年前のこと。

我が一ト代を百年として、その三倍もの昔にあった出来事。

その火山灰がこの地までに及んでいたとは。

火山灰が降り注ぐ景が眼前に彷彿とした。

もう一度その土砂を見つめ直すと、しつとり湿りを帯びてい

いとしささえ感じられる。

その黒色に我が一ト世の短さを感じた一瞬でもあった。

そのいとおしさをひとつまみ頂いて家に帰った。

時折、茶の間であの時の土砂を取り出して眺めてみるが、今はもうカサカサに乾いてしまつて何の変哲もない一土塊。

だが、あの時の景は鮮明だ。